

訓註『誠拙禪師語録』その二

鈴木 木省訓

誠拙禪師語録 卷中

侍者 某甲 編

大愚道人 校

真讃

一 自讃

野僧、終日 無為。詩を読むことを解くす。因って、若し剃頭の俗漢と謂わば、半肩、斜めに伽梨を著く。

○真賛―先輩、高德の画像・自然の風物の画図に、これを讃える偈頌を誌すこと。○自賛―自画像に自分で書いた偈頌。○野僧―拙僧など僧侶の自己の謙僧。○伽梨―袈裟。

二 正統院闍衆の請。

汝、能く我を見ること父の如く、吾、実に汝を見ること子の如し。子、孝ならず。父、嚴ならず。讃することは、則ち、嘖り、罵ることは、則ち喜ぶ。咄哉。汝、十有六、東巖禪師に海岸に謁し、初めて此の事有る

ことを知る。師、汝に「狗子無仏性」の話を与えて参窮せしむ。而して三寒暑を閲て、理会することを得ず。時に、汝、予の荊林禪師、衆の与に龍山に開堂するを。便ち、往きて掛搭す。師、一日、垂語して曰く、「燈籠露柱、狸奴白牯、分明に是れ趙州狗子無仏性の話にあらず」というを。忽然として省有り。直に、方丈に詣って所解を呈す。師、更に諍訛の因縁数件を挙して、急急に詰問す。酬対、脱洒ならず。自ら謂らく、此の事、見得分明なり。只、是れ機に臨んで吐くこと能わず。居、何を無くして起単す。遂に、英名の尊宿三四員に参見す。亦、只、一般末後は、武溪老人の室に参ず。一日、老人、汝が入室し来るを見て、逆問して曰く「汝が疑処、俱胝和尚に咨詢せば、果して如何ん」。語声、未だ断えざるに、覚えす。起きて礼拝す。老人責めて曰く、「汝、箇の什麼んの道理を見てか礼拝す」。汝、即ち一指を堅起す。老人、還って曰く、「不是、不是。」俱胝和尚、別に道処有り。及ち、汝、耳を掩って走り出て去る。翌日、一偈を呈して曰く、「俱胝、指を堅つ。学人指を堅つ。

別に道処有り。是れ其の指にあらず。然も是の如くなりと雖ども、汝、業債を免れず。」安永丁酉の冬、十月、赤脚で瑞鹿に登り、倒に東山を把えて逆水に走る。罪過弥天。進むに進む処無く、退くに退く処無し。跡を万年に寄せ、聖僧に対し、喫飯幾と。四十年所、齡、古稀を過ぎ、埋骨近きに在り。文化丙子、臘八前、一日、万年の闔衆、汝を携え来って讃語を請う。敢えて固辞せず。迅筆に数語を題す。俳優に似たりと雖ども、明眼の人に愧じる無し。及ち、父子、相い顧み、手を拍ち歌って曰く、「佯狂の魔子、牙齒無し。黄服朱衣、何んの面髯ぞ。半身を失却して羞を識らず。帰来独坐す。円窓の裡。」咄。

○正統院—現円覚寺僧堂。○闔衆—大衆。○東巖禪師—不明。○狗子無仏性—『無門関』第一則の趙州無字の公案。○荊林禪師—不明。○燈籠露柱—眼前の非情物の代表的物象をいう。○狸奴白牯—下等の動物の意を示す代表語。○誦訛—言葉でとらえられない肝心かなめの所。○急急—急速に、間髪を入れず。○起草—叢林に居る僧が、そこに暇を請うて去ること。○武漢老人—月船禪慧のこと。○俱胝和尚—唐代の人。大梅法常の法嗣、天竜を嗣ぐ。天竜より一指頭の禅を伝えられた。伝燈録十一。祖堂十九等に伝あり。○安永丁酉—一七七七年。○赤脚—すあし。○瑞鹿—円覚寺の山号。○万年—正統院の山号。○古稀—七十才。文化丙子—一八一六年。○佯狂—まちがいのふりをする。○黄服朱衣—僧衣のことか。

三 俊禪人の請

食に魚無く、出づるに車無し。喫。春風、門外の柳、柳を吹く。遅日、林間の花、花に映ず。無用の用、何んぞ尽期有らん。俊禪、筆を点じ

て、錯って眉を安んず。打一棒。痛痒誰にか在る。我、此に切なり。你、那んど、知ることを得ん。咄。

○俊禪人—志山梵俊か？。○眉—眉毛を安んず。本来の自己を見た。○打一棒—一棒をくらわす。○切—心から。痛切である。

四 敬禪人の請

能画、所画、畢竟、是れ空。若し、相い似たりと謂わば、月を水中に捉う。縦い、相い似ざるも、網を張って風を満つ。敬禪、敬禪。月下、茶を煎て相い対して喫す。渠は、是れ無我の無用の翁。

○敬禪人—不明。

五 大隋座原の請

大隋嶺公、余が肖像を写し来って賛を乞う。余、之を退けて曰く、「今時、叢林で知識と称する者、往往、自賛毀他して、自らの肖像に題す。公、我をして者の保社に入ら使めんと欲するや。」公、低頭して曰く「然らず。希わくは、和尚の一語を得て、以って、終身の箴と為さんと欲す。」と。及ち、四莫を書して讃辞に充つ。第一に、自らの安逸を覓むことと莫れ。第二に、他の過失を見ることと莫れ。第三に、世財に貪著することと莫れ。第四に、無事に山を下ることと莫れ。一に反せば懶墮し、二に反せば禍を招く。三に反せば愧多し。四に反せば事生ず。四つは、皆、違わざることは、則ち、三家の村里、一小院子の好長老なり。否なることは、則ち、酒肉女犯の僧に如同すること必せり。

○大隋—大隋口嶺、不明。○座原—本来、座元と書くが、円覚寺開山、無学祖元の元と同じため原を用いる。○保社—仲間、寺院のこと。

頌古

六 円覚經に云く、「一切時に居して、妄念を起さず。諸の妄心に於いて、亦、息滅せず。妄想の境に住して、了知を加えず。了知無きに於て、眞実を弁ぜず。」

時を感じては、花にも涙を濺ぎ、別れを恨んでは、鳥にも心を驚かす。將に謂えり。鉄圍山上の鉄。元來、金色界中の金。

○頌古―祖師の遺した古則に偈頌をもって簡潔に宗旨を宣揚したもの。

七 六祖風幡

是れ風幡、心、動著するに非ず。肉辺、菜を寄せて、口、涎を流す。君に勸む。更に尽せ一杯の酒。雪、藍関を擁して馬前まず。

○六祖風幡―広州の印宗法師の法性寺で、印宗に六祖であることを見破られ、六祖出世の因縁となった公案。『無門関』第二九則等に出づ。

八 興化、克賓を罰す。

唱道の言、敢えて聞かず。他の一棒を喫す。果して群を驚かす。然も、法戦勝つこと能わざると雖ども等出す。罰錢五貫文。

○興化罰克賓―興化存獎が弟子の克賓に、まだ教化の資格が備っていないと言ひ、問答数番し、槌を撃つて克賓が問答に破れたことを宣示した。そのため克賓が院を出ていった。興化が弟子を發憤させる活手段。○罰錢―罰金のこと。

九 趙州、投子に問う。「大死底の人、却って活する時如何ん。」投子云く「夜行を許さず。明に投じて、須く到るべし。」

妖は、徳に勝たず。千里独行、国亡じ家破る。果然として栄と闘わず。仏法未だ会せず。祖意、何んぞ明らめん。趙州は鼻直、投子は眼横。阿

呵呵。意を防ぐこと城の如し。

○趙州問投云々―『碧巖錄』第四一則「趙州大死底人」。○鼻直・眼横―鼻はまっすぐ、眼は横にある。ものの本来あたりまえの相。○阿呵呵―笑い声をあらわす。言語道断のところに發せられる笑ひ。

十 徳山托鉢

大小の徳山、満肚の疑。神号び、鬼哭す。眼、眉の如し。三年の活は、上堂の別なるが為なり。巖頭密啓の遅きに在らず。

○徳山托鉢―『無門関』第三三則。○大小―あれ程の。○上堂―法堂に上り説法すること。○巖頭―巖頭全叢(八二八―八八七)徳山を嗣ぐ。

十一 趙州、茱萸を訪ぬ。

老老、大大、山又水。纔かに住处有れば、還って寺無し。馬騎弄し得。三十年笑るに堪たり。驢子に騎ることを解せざることを。

○趙州訪茱萸―趙州と茱萸との禪機を示す問答。『禪苑蒙求』巻下に出づ。○老老大大―修行も円熟し、態度、風貌も堂々としたさま。

十二 俱胝一指

柳に對し、花に背いて小堂を構う。風流、独自、春光を弄す。一壺の美酒、濃くて緑を浮ぶ。只、是れ人の容易に嘗むる無し。

○俱胝一指―『碧巖錄』第一九則。『無門関』第三三則等に出づ。

十三 慈明榜

東土、西天、此の字無し。風に和して搭在す。子雲が盧、晋時、謬って義之が手に落つ。竟に、楷書と草書とを作す。

○慈明榜―慈明楚円(九八六―一〇三九)汾陽を嗣ぐ。榜とは禪院における掲示

板。○東土西天―インドと中国。○義之―王羲之(三〇三〜三七九)晋の書家。

十四 雪峰云く「南山に一条の鼈鼻蛇有り。汝等諸人、切に、須らく好く看るべし。」

南山の鼈鼻蛇、東海の昆布、大いに失命の人有り。動容に古路を揚ぐ。依然として蹤由を汲し、果して、雲を拿え、霧を攫む。我は更ち不佞麼。隣鶏、寒くして樹に上る。

○雪峰云々―『碧巖録』第二則に出づ。○鼈鼻蛇―人が噛まれると必ず死ぬことから、喪身失命させるような辛辣な手段を弄する人。○古路―仏祖や古人古徳の履踐した路。又、古人の機語。○不佞麼―不是と同じ、正に対して反の立場。

十五 徳山油糞

婆子、油糞を売る。徳山、餓えを療さんと欲す。若し、是れ三世心、不可得ならば、我に一箇を与えよ。

○徳山油糞―『碧巖録』第四則に出づ。○三世心不可得―『金剛經』の中「過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得」とある徳山が禅に参じる因縁の話あり。

十六 乾峰三種病

紅顔、青絹の扇。半ば、翠簾を捲いて斜めなり。桃李無言の恨み、争でか、解語の花に如かん。

○乾峰三種病―『五灯会元』卷一三、乾峰章に出づ。乾峰の垂示で、法身に三種の病、二種の光がある。

十七 雪峰云く「尽大地、撮し来たるに、粟米粒の大いさの如し。」

大洋海底、果して塵を揚ぐ。舜若多神、笑って身を現す。将に謂えり。

陳言、意致無しと。一回挙著すれば、一回新たなり。

○雪峰云々―『碧巖録』第五則に出づ。○舜若多神―虚空の神。また無色界天を指す。

讚請

十八 出山

我に出山の賛語を求む。未だ、画中の聖容を見ず。雪山の雪後、朔風惡らし。別峰に向って古蹤を見むること莫れ。

又

錯って王室を出で、錯って雪山を下る。更に一錯有り、光を眉間に放つことを。

○出山―釈尊が悟りを開いて雪山を下る時のこと。

十九 弥陀

雪白くして、雪に非らざることを知れば、漆黒にして、即ち、是れ漆。唯だ、信心の者有って、弥陀仏を念ぜず。

○弥陀―阿弥陀の略。

二〇 釈迦、文殊、普賢一幅

有智無行、有行無智。咄、幾と、諱に触る。

又、

一仏二菩薩、同智不同行。斯經有るが為に、余が禿筆を煩わす。

○咄―したうちの声。咄破の意。

二一 文殊

三尺の剣有って、亡仏の師と為す。汝が師は何物ぞ。我が師を師とする

こと莫れ。

又、半身、手に如意を持つ。

獅子、何んぞ去る。斜に如意を担ぐ。善きかな。文殊、人事を解せず。五台の雲を摘んで二時の食に充つ。敢えて、吾愚を將って、豈に、汝智に換えんや。

○文殊―文殊師利の略。○如意―仏菩薩の説法の老婆心切なるを爪杖にたとえて用いたという。○五台―五台山。文殊の靈場。

二二 千手観音

我に庠処有り。全く是れ他に憑る。千手足らず。也た、誰をして爬か令む。

○千手観音―六観音・七観音の一。詳しくは千手千眼観世音菩薩のこと。

二三 虚空蔵

諸願、誰か能く満す。蓮華、宝珠を擎ぐ。大身纔かに現ずる処、賢聖、謾りに名模す。

○虚空蔵―虚空蔵菩薩。智慧慈悲の功德が広大無窮で、あたかも虚空を蔵したような菩薩。

二四 寒山拾得同軸

寒山拾得、同見同証。此の字を識得すれば、他の興を添得せん。

又、

別に奇得無し。喜怒常ならず。生帯を擲下し、動地放光。

○寒山拾得―寒山は唐代の禅僧。『寒山詩』は、彼の作と言われる。拾得も唐代の人。天台山国清寺に隠栖していたという僧。寒山拾得豊干の三人を国清の

三隠という。

二五 豊干

四睡、各の覚む。杖を曳いて独行す。虎児未だ到らず。鐘、国清に動く。

又

杖に伏して即ち起き、虎を撫んで且つ行く。寒拾を知ると雖ども、你が名を忘却す。

○豊干―唐代の人。国清の三隠の一人。仏理を問えば「隨意」の二字を以って答えたという。○国清―浙江省台州天台県の北、天台山に在る。天台宗の根本道場。

二六 達磨

達磨の肖像、白隠の筆意。誠拙之を写す。神光未だ至らず。

又

耳朶の金環動き、眼晴の碧玉開く。分明に、能く記取す。敢えて、西自り来らず。

又

茲の器、此に至り。直指、何をか指す。他の一臂を偷んで、自らの両齒を失す。皮肉骨髓、革履に換え得たり。誰か能く你を識る。我聞くこと是の如し。響。馬腮、鳥髯、蒙頭、衲被。

又 半身

九年の面壁。宿世の業因。一臂を偷み得て、半身を失却す。

又 渡蘆

十万里程、来意軽ろし。一茎蘆上、波を踏んで行く。百千年後、人の会

する無し。謾りに濤声を喚んで雨声と作す。

又 手に楞伽を持ち、足蘆葉を踏む。

遙かに震旦を視ること、掌中を觀るが如し。斯の経有るが為に、祖風を滅却す。咄。今秋、文政紀元の日。再会、還って、面上の紅を添う。

○達磨―禪宗の初祖。○白隱―白隱慧鶴（一六八五―一七六八）のこと。○神光―達磨の法を嗣いだ二祖慧可大師のこと。○耳朶金環―達磨画の耳に付いている輪。○記取―覚えておく。○皮肉骨髓―『歷代法宝記』以降の資料に見ることのできる達磨門下の得法の様子より出た語。○九年面壁―達磨が印度より来て、少林寺に住し、九年間面壁坐禅し、法を嗣ぐ者をまったという故事。○宿世―前世、過去世。○業因―未来の果報をまねく原因。○渡蘆―蘆にのった達磨図。○楞伽―『楞伽經』のこと。○震旦―中国のこと。古代印度人が中国をチーナスターナと呼んだ。音訳。○文政紀元―一八一七年九月

二七 六祖

杵頭、柄有り。明鏡、台に非ず。本来無物。満面塵埃。

○六祖―六祖慧能（六三八―七一三）のこと。大鑑慧能。○「菩提本無樹、明鏡亦非台 本来無一物 何処有塵埃」の一偈によって、五祖弘忍に衣鉢を相伝された。

二八 徳山

好箇の担板、白日に金を攫む。棒頭眼無し。頼に知音に遇う。

又

実に一法無し。棒頭眼豁す。巖頭に逢著し、三年の活を得たり。

又

問有れば即ち棒す。過、龍潭に在り。未後の句、未だ夢にも参ぜず。

○徳山―徳山宣鑑（七八〇―八六五）のこと。青原下。「臨済の喝、徳山の棒」と言われ、棒を用いて接化した。○担板―板を肩にかつぐこと。視野が一方に限られ、広い視野に立たない偏見をいう。○白日―白昼。ひるま。○棒頭―棒の先。○知音―『列子』に出づ。真に心を知りある親友のこと。○巖頭―巖頭全叡（八二八―八八七）徳山の法を嗣ぐ。徳山との問答がある。○龍潭―唐代の人。天道悟道を嗣ぐ。法嗣に徳山を出す。

二九 臨済

惟凡惟聖。熱喝噴拳。何等の面觜ぞ。驢辺に滅却す。

○臨済―臨済義玄（？―八六七）黄檗を嗣ぐ。○熱喝噴拳―臨済宗の宗風。

○驢辺―臨済と三聖との問答に「向這瞎驢辺滅却」「臨済録」中「行録」ある。

三〇 普化

臨済を瞞じ得て、未だ驢鳴き作さず。鈴声断ずる処、面目分明。

又

棺裡に瞠眼し、雲間に身を現す。笑うに堪たり。大悲院、斎有り、人に供せず。

○普化―盤山宝積を嗣ぐ。○鈴声―鈴鐸を振って歩いている普化に対して、臨済が偈をつかわして勘弁した。『臨済録』「勘弁」に出づ。

三一 巖頭

蜜に其の意を啓す。果して沙汰に値う。満面の慚惶、仏祖不会。

又

漢水、秋寒くして蟾影清し。渡牌江上、空しく鳴かず。悲しむに堪え、

笑うに堪えたり。程を貪る客、猶、麤公の背後に向って行く。

○巖頭—巖頭全藏（八二八～八八七）徳山を嗣ぐ。○沙汰—朝廷の命令。会昌沙汰。中国仏教史上、最大の破仏。○漢水云々—巖頭渡子の公案をうけたもの。巖頭は会昌の法難にあい湖水のほとりで船頭をしていた時、老婆との問答による。

三二 香巖

瓦礫竹に触る。其の声を聞かず。所知を忘ずる処、転に無明を長ず。

○香巖—香巖智閑（？～八九八）。瀉山靈祐に参じた時、父母未生以前の一句を道取せよと詰問され答えられず、瀉山を辞して、南陽慧忠の遺跡に住していた。ある日、掃除をしていて瓦礫が竹にぶつかる音を聞いて悟入し、瀉山を嗣ぐ。

三三 丹霞

木仏焼き尽す、院主眉墮つ。只、天然のみ有って、敢えて向火せず。

○丹霞—丹霞天然（七三九～八二四）○木仏云々—丹霞天然が慧林寺で、木仏を焼いて暖を取っている所へ、院主が来て、これを見て呵責した。丹霞は、仏を焼いて仏舍利を取ると言った。院主は、木仏に仏舍利は無いと言ったため、院主は眉毛が脱け落ちてしまったという公案。

三四 布衣

指上物無く、囊中に銭有り。口を開いて合せず。一笑千年。

○布衣—（布袋）（？～九一六）布袋和尚のこと。誠拙には、布袋の絵に「指上無物云々」の画賛がある。

三五 維摩

頭上巾を戴き、手裡払を執る。唯、白拈賊のみ有って、維摩詰と作さず。

○維摩—維摩詰のこと。○巾—物を拭うに用いる布。○払—払子のこと。○白拈賊—白昼盗賊のこと。転じて、目にもとまらぬ迅機、大機用をいう。

三六 烏菟瑟摩明王

謾りに枯腸を把って、精神を抖擻す。者の糞穢に和して、山川春を回らす。

○烏菟瑟摩明王—火頭金剛とも。東司に抖る明王。不浄を転じ清浄にさせる徳をもつという。○擲礙—ふるいを出すこと。

三七 歳星善神

若し、人心を発し、此の神に帰依せば、吉祥如意、物物春を回らす。

○歳星善神—九曜の第五木曜という東方に配せられる神。○吉祥—勝・首・徳の意。○如意—自在。意の如く。又は、僧の所持する道具。

三八 弁天

希求歎む処、天、七珍を雨らす。簞食瓢飲。回すや、独り貧し。

又 松下琵琶を抱く。

千年の松下、誰か、此の神を知る。四絃の曲罷む。天、七珍を雨らす。

○弁天—護法の天女で、無礙の弁才を有し、仏法の弘通をはかる天人。○七珍—七宝、金銀・瑠璃・磲磔・瑪璃・珊瑚・琥珀・真珠などのこと。經典によって異説あり。

三九 三面大黒

三世心を識得すれば、三世不可得。此の神、此の意に通じ、福寿、如意

に得る。

○三面大黒―大黒天神。もと印度の神で、三宝を守護し、飲食を豊穰にして福德を与える神として崇信された。○三世心―過・現・未の三世の心。

四〇 寿老人

頭長く、脚短し。雙眉霜に似たり。錯って南極と喚ばば、物物祥を為す。

○寿老人―七福神のひとり。寿星の化身で、南極老人ともいう。白髪で、つえをたずさえ、うちわを持ち、しかを連れている。

四一 神農

百草の郊外、春風烟の如し。蚕吐不下、真葉現前す。

○神農―中国古代伝説上の皇帝の名。火の徳を有して炎帝といい、はじめて人民に農作を教えたので神農という。また、医薬の神ともされている。

四二 船子夾山

一橈風起り、月、波間に碎く。打不及の処、船子夾山。

又、

三寸、鉤を離れて一句多し。點頭、回顧、果して蹉過。無慚愧の漢、蹤跡没し、江上、塵を揚げて、陸、波を起す。

○夾山―夾山善会（八〇五〜八八一）船子徳誠を嗣ぐ。『五灯会元』に出づ。船子と夾山との嗣法に因んだ公案。

四三 南泉、帰宗、麻谷同じく往きて忠国師を礼す。

帰宗、麻谷、些の長処有り。老倒たる南泉、還って云う。去らずと。

○南泉―南泉普願（七四八〜八三四）馬祖道一を嗣ぐ。○帰京―帰宗智常（唐代

の人）。馬祖を嗣ぐ。○麻谷―麻谷宝徹（唐代の人）。馬祖を嗣ぐ。○「洛下の三評」と言われる公案。

四四 定上座、欽山を接す。

無位、非無位、諦当、不諦当。咦。雪巖、同参の事を失すと雖ども、贏得たり。欽山面上の黄。

○定上座―唐代の人。『臨濟録』によれば、臨濟の法嗣とされる。○無位非無位―『碧巖録』第三十二則の評唱に、定上座と欽山文遂との問答がある。

四五 黄檗慈母、足を洗う図。

眉間の円珠、脚底の黒子。吾を知り、吾を罪す。対面千里。

○黄檗―（不詳）南岳下。臨濟義玄の師。○黄檗が出家した後、愛児を思ふあまり、母は失明した。母は、黄檗の足にあるほくろをたよりに人の足を洗いながら黄檗をさがしたという故事による。

四六 鍾馗

怒髪嗔眼、惟惟惟。神、茫茫たる天地、今、猶、右のごとし。錯って、明皇夢裡の人と作す。

○鍾馗―疫病神を追いはらう神。唐の玄宗皇帝がゆめに見て、呉道子にえがかせたのに始まり、ひげづらで大きい目をしている。

四七 餓鬼、前生の髑髏を鞭する図

吾は是れ你。你は是れ吾。人生限有り。恨限無し。空しく春風をして五湖に満たさ使む。

○餓鬼―三惡趣、四惡趣、六趣の一。前生に慳貪嫉妬をもって、身口意の悪行をした報いとして趣くところとされ、常に、飢渴に苦しむところから、この名

がある。

四八 閻王

縦い此の因有るも、彼の縁無かる可し。馬面牛頭、業鏡高く懸く。

○閻王―閻摩大王のこと。衆生の罪を監視し、悪の恐るべきことを知らしめる冥界の総司令とされる。印度の一般的考えとしてあったものが仏教の中に入ってきたもので、餓鬼界の主、地獄の主とも、地藏菩薩の化身ともいわれ、その説は一定しない。

四九 老子

蹇薄、人の識る無し。断刃、一生を空しくす。函関、紫氣浮ぶ。知んぬ、你、虚しく行かざることを。

○老子―周代の人。姓は李、名は耳、字は伯陽、おくり名は聃。自然を尊び、人為的な道德、学問等を否定した。○函関―函谷関のこと。

五〇 張果

葫蘆一祝すれば、駿馬奔馳す。穆王をして御せしめず。誰とか瑤地に到る。

○張果―人名。唐の方士。玄宗に尊崇された。八仙の一人に数えられ、通玄先生、張果老と称せられた。

五一 蝦蟇

身を蔵して跡無し。同人窮め難し。閻闔の門外、暑を避け池に浴す。

○蝦蟇―ガマ。かえるの一種。

五二 鉄拐

質本魁梧。已んぬるかな、餓卒。華山路遠し。既に仙区に在り。

○鉄拐―鉄のこえ。○餓卒―うえ死にしたしがいい。

五三 賈島

未だ推敲を決せず。独り自ら狼狽。月白く風清し。誰か門外に有る。

○賈島―(七七九～八四三)、中唐の詩人。『字は浪仙。○推敲―賈島が自作の詩を「推・敲」のどちらにするか苦心した故事。

五四 壺公

乾坤の内、別に乾坤有り。魚有り酒有り。房や恩に負く。

○壺公―壺丘子を指すか?。壺丘子は列子の師である。

五五 陸羽

無字の茶経、能く読む者は誰ぞ。清風明月、只、是れ自ら知る。

○陸羽―(?～八〇四)茶道の開祖。唐代の人。『茶経』を著わした。

五六 関羽

義氣、紅日を貫く。英風、碧空に逼る。誓って我が護法と為る。大漢の美、髯公。

○関羽―三国の蜀の名将。字は、長生、雲長。蜀の劉備に仕え、勇名をはせたが、呉の孫権に殺された。後世、国民的英雄とあがめられ、関帝廟にまつられている。○髯公―「曹操、関羽に錦囊を賜う」の語がある。

五七 東方朔

王母青鳥、未だ瑤池を離れず。桃を偷して手に在り。知らず。誰をか顧る。

○東方朔―前漢の人。字は曼倩。弁舌、文章に長じ、又、こっけいと奇行によって武帝に愛された。伝説では、仙術をよくした方士で、西王母の桃をぬすみ食べ長寿を保ったという。

五八 陶淵明

壺に憑って夢を為す。知らず、何んの夢ぞ。曾って廬山に遊ぶ。応に、戒酒の夢なるべし。

○陶淵明—陶潜（三六五？～四二七）東晋の自然詩人。五柳先生と自称し、世に靖節先生とよばれた。酒と菊を愛し、田園生活の実感を詩にえがいた。

五九 蘇東坡

蘇公、戒公、不死不生。吟心未だ就かず。驢に跨って便ち行く。

○蘇東坡—（一〇三六～一一〇一）宋代の文人。禪に傾倒した人として名高い。

六〇 考槃翁

空也上人の門人。

葫蘆を拈起し、撃つこと再三下。什麼の声をか為す。空也、空也。

○考槃翁—不明 ○空也—（九〇三～九七三）天台宗。弘也とも書く。生国不詳、二十才で出家し、自ら空也と名のる。空也の念仏は口称念仏である。阿弥陀聖、市聖と呼ばれた。

六一 芭蕉翁

名と利とを捨て、月と花に和すを愛す。破笠雨を窺う。今夕誰が家ぞ。

○芭蕉—松尾芭蕉（一六四四～一六九四）臨済宗の居士。俳諧の大成者。仏頂河南に参じ印司を受く。薫風俳諧を大成した。

六二 利休

徳行、徳ならず。其の徳、必ず至る。趙州の茶を喫し、智と愚とを忘す。智や愚や、汝知り、吾識る。

○利休—千利休（一五二一～一五九一）織田・豊臣時代の茶道家。秀吉の激怒にふれ自刃す。○趙州茶—「趙州喫茶去」の公案。『趙州録』等に出づ。

六三 僧の茶釜を売る図

空中空無く、空外空無し。茶具を担取し、松風を聴かんと欲す。

○茶釜—茶をたてる道具

六四 西の宮太神

西宮の君子、笑顔春の如し。千尺の絲綸、無欲の人を釣る。

○西の宮太神—兵庫県、西国街道と中国街道の交わる所、西宮戎神社がある。

六五 美人、猫児を抱く図

盼たる美目、宛転たる蛾眉、借たり一笑、猫児の為にせず。

六六 羅漢 遂翁禪師の画

把針、太だ綿密、伏虎、神通に非ず。画図の看を為す底、争でか浮島翁を知らん。

○羅漢—一切の煩惱を断滅し、なすべきことを完成した人。○遂翁—（一二七一～一七八九）、号は元廬。白隠に参究すること二十年、その法を嗣ぐ。

六七 一目人図

一隻眼を開き、兩点の眉を分つ。盲看を瞞せんと欲せば、却って他に欺からる。

六八 無準禪師

大唐、謾に烏頭子と喚ぶ。日本を看來れば、白髮の翁。準的有り、準的無し。松原師叔、耳何んぞ聾す。

○無準—無準師範（一二七八～一二四九）、破庵祖先を嗣ぐ。仏鑑禪師号を賜る。円覚開山、『無学祖元等が弟子に在る。東福円爾も入宋し、無準の法を嗣ぐ。○松源—崇岳（一二三二～一二〇一）密庵咸傑の法を嗣ぐ。

六九 法燈国師

仏即是心、心即是仏。後代の子孫、柱に膠して瑟を鼓す。

○法燈国師—無本覚心（一二〇七—一二九八）房号は心地房。

七〇 仏光国師

龍淵の季子、鹿門の鼻祖。南宋の郷話を忘却し、却って日本の言語を学ぶ。手中の金毛、別処を払わず。咄。

○仏光国師—無学祖元（一二二六—一二八六）無準師範の法を嗣ぐ。北条時宗は円覚寺を建立し、師を迎えて開祖とする。仏光国師の勅諭と円満常照国師の号を賜る。

七一 大燈国師

大小何んぞ敵せん。徳、豈に、常の徳ならん。天源を吸尽し、仏国を吐却す。茲に因って紫野の芳草、今に至って黄色を作さず。

又

背上、笠を負い、掌中瓜を擎ぐ。苦甘弁ぜず。謾に歯牙を弄す。

○大燈国師—宗峰妙超（一二八二—一三三七）大応国師、南浦紹明の法を嗣ぐ。大徳寺の開山。○掌中瓜—南浦の印可を受けた後、五条下でこじきの群にかくれ、聖胎長養していた。大徳寺の開山としようとし、宗峰をさがしたが不明で師がうりを好物としていた。そこで、うりを与えると言って、師をさがした故事。

七二 関山国師

是れ法、是れ正、是れ心、是れ妙。柏樹の賊を子とし、迦葉の微笑を讎とす。竊桶、篋籬鬼哭し神叫ぶ。罪過弥天、五帝詔を賜う。咦。

○関山国師—関山慧玄（一二七七—一三六〇）妙心寺開山。○柏樹賊—関山には、語録がなく、「柏樹子の話に賊機あり」等の二三語のみがのこっているだけである。○竊桶、篋籬—関山が、雨もりの時、何かもってこいと言ったのに対し、ザルを出した小僧をほめ、オケをさがしてもてきた小僧をしかった故事。

七三 盤珪禅師

盤に和して托出す。玉に非ず、珠に非ず。連城、争でか罷く、月、珊瑚を照す。

○盤珪禅師—盤珪永琢（一六二二—一六九三）『大学』を学んで「明德」について疑問を持ち、牧翁祖牛に参じ、その法を嗣ぐ。「不生禅」を挙揚す。

七四 月船和尚

一隠の三紀、影、山を出でず。若し、是れ仏法ならば万重の関を隔つ。満船、月を載す。人何んが去る。衲子、一班を窺うに由無し。

○月船和尚—月船禅慧（一七〇二—一七八二）北禅道済に嗣法す。（古月禅材とも）誠拙周樗が得法の弟子。

七五 仁周和尚

独坐雄峰、魔仏蹤を潜む。更に奇特有り。甕を喚んで鐘と作す。是れ、之を仁周老漢と謂う。当機の一喝、綱宗を滅す。

○仁周和尚—不明○独坐雄峰—『碧巖録』第二六に出づ、百丈の語「独坐大雄峰」。

七六 天沢和尚

江西月を翫ぶ時、払袖し去ること太だ早し。金波千盞揺らぎ、寒衣一村搗つ。咦。将に謂えり。左顧瑕無しと。却って是れ右盼已に老いたり。

○天沢和尚―不明。○江西―馬祖道一のこと。○拈袖―そでをうち払う。○湛―にらみみる。

七七 寛嶺和尚

松老雲閑なり。竹密に風清し。分明に主有り。誰か其の名を知る。

○寛嶺和尚―不明

七八 湛堂和尚

普賢の行を行として、牧牛の歌を歌う。何等の面觜ぞ。早く他に孤負す。羌笛一声、風景暮る。峨眉山月、感、殊に多し。

○湛堂和尚―湛堂元丈（一七四〇～一八〇六）、建長寺の通玄元聰の法を嗣ぐ。

『芝園集』一卷がある。

七九 梅莊和尚

意、匠に涉らず。丹青真に逼る。全く文字を離る。語を吐けば人を驚かす。将に謂えり。禅月と。鐔津に撞著す。法門の潤色、唯、念と為す。

四海、謾に観国の賓と称す。咄。

○梅莊和尚―梅莊顯常（一六三四～一七一六）字は大典。相国寺の学僧で、出家して仏乘に涉り、経史に通じ、文章等が巧みであった。○丹青―歴史書。

○禅月―『禅月集』十二卷 ○鐔津―『鐔津文集』十九卷。

八〇 覺堂和尚

時節、将に過ぎんとす。付囑頻頻、没蹤跡の処。敢えて身を藏さず。咄。気仙千里。仙台の北。衣鉢帰る時、雨雪新たなり。

○覺堂和尚―不明。○没蹤跡―あとかたがない。言葉・行為のあとをとどめない。

八一 一行和尚

万法侶たらず。丹霄に独歩す。西江を吸尽し、眼活して鵝の如し。此の老、若し在らば、豈に寂寥を致さんや。道の為に臂を断ち、雪に立って腰を没す。痴人の面前、山遠く水遙かなり。

○一行和尚―不明。

八二 一酬和尚

一問僅に伸ぶれば、百酬文を為す。傍人耳を側つ。何んぞ聞くを解せざる。咄。

○一酬和尚―不明。

八三 退耕和尚

光を太嶺に放ち、玉を石田に産す。正法眼を滅し、紫袍天に朝す。嘆。将に謂えり。身を宇宙に横たうと。微塵裏に鞦韆を打す。

○退耕和尚―不明

八四 木韻和尚

横に白払を拈ず。仏祖蹤を潜む。滅定を起たず。浜松に往来す。嘆。少林久坐、春眼断つ。日は落つ、天台方広の鐘。

○木韻和尚―不明。

八五 円瑞和尚

阿弥陀寺に住し、極楽城を撃碎す。須らく知るべし。此の漢有ることを。其の名を聞くことを欲せず。咄。一色村前、月昼の如し。万亀山下、転た明明。

○円瑞和尚―不明。○万亀山―山号・不明

八六 鈞国和尚

鈞国長老、性急に、気豪なり。浮島を吞尽し巨鼈を吐却す。茲に因つて、富嶽雪浪、最も高し。帰來住院、説法滔滔。六十有七、微恙勞無し。何の図ぞ隻履。俄然西翔。別に奇特有り。深く吾が曹に属す。響。然かも口裡牙齒無しと雖ども、頬上、霜に傲る、尺二の毛。

○鈞国和尚—鈞国玄陶（一七四六—一八一二）遂翁を嗣ぐ。『近世禅林僧宝伝』二卷、鈞国禅師伝中に、この一文が収められている。○浮島—遂翁元廬のこと。

八七 巢父許田

許由耳を洗い、父、牛に鞭つ。長天渺渺、秋水悠悠。

○巢父許由—巢父は堯の時代の隠者。山に住み、木の上に巢を作つて寝たのでこの名あり。天子の位をゆずろうとしたら辞した。許由は、中国古伝説上の隠者。天子が堯が位をゆずろうとしたのをことわり身をかくした。

八八 子陵

光武、位に即き、子陵、釣を垂る。史、客星を奏す、龍顔一笑。

○子陵—不明。○光武—後漢初代の帝。

八九 一山和尚

曾つて善知識を扨び、南遊二十年。進んでは、身を虎口に横たえ、退いては、跡を龍眠に寄す。非時食を怒罵し、無事禅を弾呵す。俄然として隻履を携え、一喝、驢辺に滅す。咦。将に謂えり。行に臨んで三寸密なりと。鶯歌一曲、錯つて流伝す。

○一山和尚—一山心恒（一七四〇—一八一五）大休慧昉の法を嗣ぐ。この一文

は、一山の頂相に付した賛。『近世禅林僧宝伝』の中に出づ。

九〇 広輪和尚

没蹤跡の処、諸の威儀を具す。白扠手に在り。烏藤誰にか伝う。咄。東山、曾つて衣鉢を伝えし自り、水を灑ぎ花を養う。是れも一時。

○広輪和尚—不明。

九一 瓊巖和尚

降魔の窟に踞し、無問を関と為す。法の燈を滅却し、天顔に咫尺す。何等の面觜ぞ。徳、似山より重し。王公外護し、祖仏班に列す。咄。此の話、何ぞ妨げん。千歳の後、又、流水に随つて人間に落つ。

○瓊巖和尚—不明。

九二 龍勝寺中興

瑞雲山古く、龍勝寺新たななり。箇の中興に徳有つて、他の外護の人を得たり。

○龍勝寺—京都府舞鶴市にある。

九三 西山和尚

西山の面目、亮公の心肝。大唐日本、同時に相看る。寧ろ地獄に入るも涅槃を證せず。熊家問訊、指東に瞞せらる。畢竟、老僧、讚不及の処。文化乙亥、孟春尚寒し。

○西山和尚—不明。○亮公—西山亮（一一五二—一二四一）臨済宗楊岐派の大慧派。遯庵宗演に嗣法す。○文化乙亥—一八一五年。文化十二年。

九四 函海和尚

何等の面觜ぞ。函蓋乾坤、祖仏の号令。衲僧の命根、此の老和尚、之を

得て以って尊し。一別三年、再来元に帰す。速かに道え。帰元何れの処ぞ。咄。扶桑国裡、此の話無し。壁間に向って墨痕を認むること莫れ。

○函海和尚—函海禪慧（一七五三—一八一四）湛堂元丈の法を嗣ぐ。

九五 方洲和尚

南方行脚、謾に善財を罵る。彈指を勞せず、樓閣に開く。住山の活計、地転じ天回る。寂に臨んで一喝す。白日に雷奔る。響。一夜凌霄、峰頂の月、清風軽く払う常高台。

○方洲和尚—不明。○善財—善財童子。

九六 海門和尚

一漚未発、濤山浪屋。咄。露出す。龍王、真の面目。

○海門和尚—海門禪恪（一七四三—一八一三）提洲禪恕に嗣法す。

九七 鷹室和尚

真偽弁ず可し。面目嚴然、跡を少林に遁れ、法を南禪に開く。雲国に遊ぶに及んで因縁に属せず。檀越寺を建つ。衲子筵に臨む。大林樹蜜に、高山日懸る。正法眼藏、驢辺に滅却す。咦。長竿釣り得たり。松江の鱸、牧牛八十有三年。

○鷹室和尚—不明。

九八 良遂和尚

曹源、龍源、源源一源。全く涓滴無し。乾坤に弥漫す。江西の令を行じ、龐老と呑む。吞吐不下。却って怨冤を結ぶ。怨冤を結ぶ前住建長良遂大和尚、冤を以って恩に酬う。謂っべし。運松嶺の嫡子と。仰いで本中峰の遠孫と称す。

○良遂和尚—建長寺二一四世、良遂碩才。○運松嶺—不明。○本中峰—中峰明本（一二六三—一三二三）

九九 授翁禪師

出塵の俗漢、絶世の宗師、関山老を熱瞞し、敢えて紫伽梨を著く。響。行きては到る水の窮る処、坐しては看る雲の起る時。

○授翁禪師—授翁宗弼（一二九六—一三八〇）妙心寺開山関山慧玄の法嗣。妙心寺二世。神光寂照禪師を賜り、後、円鑑国師を加賜した。

一〇〇 十六羅漢

纔かに複子開けば、古瓶光を放つ。只、須らく頂礼すべし。福寿無量。巖上に跏坐し、鉄錫横に安んず。猛虎一嘯、天地風寒し。我、你を知ること久し。面黒く唇紅なり。銅鈴独銛。好し、逆風に鳴らす。

面を仰いで見ず。手裡何の声ぞ。等閑りに問著すれば、口嘘し目瞠す。蓬頭垢面、他の聲に働うに似たり。庠処を爬動す。知んぬ是れ何人ぞ。鈴声隱隱、課誦慇懃。燈籠露柱、恁麼に聞くを側だつ。

他の獅子を祝す。慈愛余り有り。慶念、如し歇まば、白払、余に贈る。眼睛を突出し、一丁を見ず。何等の定業ぞ。斯の経有るが為なり。

吉祥婬草、跏坐結跏。定中の消息、柳に入り花に入る。

手中の経巻、大千を蓋覆す。傍人你を相る。密密綿綿。

膝下の童子、汝に枇杷を薦む。若し是れ足ることを知らば、我に些些を分つ。

全身雪の如し。偏袒右肩。如来の宝杖、今、誰が辺にか在る。

今箇の宝珠、求めずして自ら至る。唯だ神光のみ有って一臂に換え得たり。

竹杖老を扶け、又、何くに之かんと欲す。眉毛三尺、須弥を繫し得たり。狸奴白狐、露柱燈籠、香煙未だ揚らず。鼻孔穿却す。

梵文明白、定印甚深。只、師と我と別に知音無し。

○十六羅漢—十六大阿羅漢。仏法を守護する十六人のすぐれた阿羅漢のこと。

各々眷属を従え、合して五百羅漢などという。一、賓度羅跋羅墮闍。二、迦諾

迦伐蹉。三、迦諾迦跋釐墮闍。四、蘇頻陀。五、諾矩羅。六、跋陀羅。七、迦

哩迦。八、伐闍羅弗多羅。九、戌博迦。十、半托迦。十一、羅怛羅。十二、那

伽犀那。十三、因揭陀。十四、伐那婆斯。十五、阿氏多。十六、注荼半托迦。

一〇一 猪頭和尚

好箇の老漢、三世仏を吞却す。此の猪頭を余して、却って、余が禿筆を煩わす。

○猪頭和尚—不明。○好箇—よい。ちょうどにあいの。○老漢—老師のこと。老熟の人。

一〇二 惠然寺の蔵むる所の聖徳太子、自ら彫む観音の影

虚空背上、親しく一刀を下す。衆生、如し会せば、眉間光を放つ。

○惠然寺—不明。

一〇三 馬師坐前、鄧隱峰、土車を推し出し、馬師の脚を損するの図

馬師、脚損す。鄧公忍痛。会と不会と、謾に夢を説くこと莫れ。

○馬師坐前云—「馬祖展足」と言い、馬祖の作略と隱峰の懸命な求道の様子を示す。○鄧隱峰—(不詳)五台山隱峰のこと。馬祖を嗣ぐ。

一〇四 古峰禪師讀並びに序

故の興禪古峰諾長老、住山久しからず。蒲を潮山に移し、自滴逍遙、疾に因って旧栖の寺に帰り、一宿亭に終わる。世寿五十有八。化縁、久しからずと雖ども、高蹤、江湖に遍ねし。孝児讚を需む。誠拙、謹んで題す。諾、這の何物をか諾す。突出す、主人公。你見よ。超師の作。瑞巖の下風に立つ。笑う。他、別に境有ることを。指点す。梵潮の中、大士、手を招くに応ず。閑雲、古峰に集まる。咄。却来す。一宿亭、正定の睡り初めて濃なり。

○古峰禪師—古峰□諾、(不明)。○一宿亭—不明。○瑞巖—瑞巖師彦(不詳)『無門関』第三則「瑞巖主人公」の話がある

一〇五 金龍寺、羅漢尊者の讚並びに序。

金龍泰玄上人、遊方の日、曾って、浮島禪師の病床で湯藥に侍す。病間あり。阿羅漢の尊容を図せんことを請う。禪師、乃ち之を画き、己に未だ瞳子を点ぜずして終う。上人、之を收藏すること久し。戊寅の冬、令徒、慧禪人に命じて、瞳子及び讚辞有らんことを請う。醜陋を顧ず。塗糊一場、書して以って還壁す。讚に曰く、

浮島、筆を下せば、此の漢現前す。幸に無しと雖ども大千を視る。小童睡り熟す。胡為ぞ知らん。神通遊戲、遠く慧禪に伴う。咄。誠拙毫頭、点滴無し。金龍秘在す百千年。

○金龍泰玄上人—不明。○浮島禪師—遂翁元慮(一七二七—一七八九)。白隱に嗣法す。○戊寅—文政元年(一八一八)。○慧禪人—不明。

一〇六 文政巳卯の春、基生因碩を高祖道節真人の肖像を写して讚辞を

請う。

彼此黑白、理尽き辞窮まる。別に手詠有り。一著同を絶す。真人道節、天下風に趨る。商山の四皓、橘中に在らず。

○文政己卯—文政二年（一八一九）。○高祖道節真人—不明。

一〇七 大光国師

此の老和尚、道、人天に契う。教律闕に訴える。吾禪を排せんと欲す。国師の一蹈、仏魔の躡を滅す。瑞峰万寿、応世年有り。咦。正眼庵中、没蹤跡。金龍山上、雲に臥して眠る。

○大光国師—日本黄檗宗の開祖、隠元隆琦（一五九二—一六七三）の号。

一〇八 百川和尚

一口纔に開く、百川を吸尽す。何等の面觜ぞ。常に長禪に在り。咦。須らく知るべし。和尚中興の徳、山、瑞雲を鎖す億万年。

○百川和尚—不明。

一〇九 百丈和尚

再び祖馬に参じ、雄峰に独坐す。全く奇特無し。三日耳聾す。

○百丈和尚—百丈懷海（七四九—八一四）馬祖を嗣ぐ。○独坐雄峰—「百丈奇特」の公案。僧と百丈の問答。「僧問曰、如何是奇特事。丈曰、独坐大雄峰」とある。『碧巖録』第二十六則に出づ。

一一〇 武田不動

三尺の宝剣、百八の摩尼、魔軍を降伏す。你は是れ阿誰ぞ。

○武田—山梨県 ○不動—不動明王。

一一一 辻氏老母の像

五障、三従、日久しく、月深し。今、頭髮を除き、頓に仏心を滅す。摩尼百八、指頭転転する処、知らず、誰か降臨す。

一二二 不動明王（道副居士の需に応ず）

山河大地、不動明王、道副昨日来つて、余が堂に升る。

○不動明王—五大明王、八大明王の一。大日如来の応化身、如来の教命を受け、忿怒の相を示し、火生三昧に住し、内外の難障、諸の穢垢を焼き、一切の魔軍怨敵を滅ぼし、あるいは奴僕となつて行者の残食を受けてこれを擁護し、行者をして菩提を成ぜしめる明王尊。○道副居士—不明。

一二三 四睡

三隠一虎、鼻息雷の如し。各自夢を作す、天台、五台。

○三隠一虎—国清の三隠、寒山、拾得、豊干の三人。○天台五台—天台山と五台山。

一二四 地藏

一錫を拈得し、大道を忘却す。咄哉。地藏、急に、須らく脳を転ずべし。

○地藏—釈尊入滅より次の弥勒仏の出世まで声聞の姿を現じ、身を六道に分けて、天上より地獄に至る一切の衆生を済度し、後、成仏せんと誓う菩薩。○一錫—放光地藏は、左手に錫杖を持ち、右手は与願印を結び、人道の救済をする。

一二五 十一面観音

面門十一、一箇の観音、花、山上に開き、月、江心を照す。

又、

面面相似たり。見処同じからず。鹿峰、月冷やかに、補陀花紅なり。

○十一面観音—大光照観音。六道のうち、阿修羅を救済する観音。四臂があり、

頭上に十一面あり、さらに頭上に一面を頂いて十一面とする。十面の内、前三面は慈悲相、左三面は瞋怒相、右三面は白牙上出相、後方の一面は暴惡大笑の相、頂上の一面は、觀世音の本地である正法明如来の仏面である。

一一六 天満宮

梅、月に和して白く、松、霜に傲って青し。厥の徳を仰ぐ可し。其の靈を見ず。

○天満宮―菅原道真を祭った神社。太宰府天満宮。

一一七 幽霊の図

敢えて黄泉に入らず。寧んぞ兜率天に進ぜんや。誰人か猶夢を作す。鐘は動く月明の前。

○黄泉―死者の行く所。○兜率天―六欲天の一。

一一八 虎溪の三笑

三人の一笑、些の来由有り。響。人、橋上自り過ぐれば、橋は流れて水は流れず。

○虎溪三笑―道教の陸修静と陶淵明、僧の慧遠が虎溪で大笑した故事。

一一九 富士山の図

万仞の芙蓉、半ば空に入る。清閑三保、自ら天工。撮し来って掲起す、晴窓の下。我も也た、身を兼ねて此の中に在り。

一二〇 怪物の図

実を実と為し、怪を怪と為す。両箇俱に是。痴漢、誰か痴漢。牛頭、馬面、通身白汗。

○痴漢―ばか者、おろか者。○牛頭馬面―地獄の獄卒。○通身―全身。

一二一 龍、富士山に昇る図

潜んで淵に在り。忽然として雲を興し、富士峰頂、龍吟聞くべし。

一二二 白鶴

丹頂、白翼、遐齡千秋。我れ今、你に跨って楊州に下らんと擬す。

一二三 猿

天の上、月無し。巖下月有り。何為ぞ、此の如くなる。両手、長短。

一二四 亀

千年の靈龜、骨を將って皮を裹む。衆生に孤負す。幸に大隋を得たり。

一二五 牛

頭角崢嶸して、鼻遼天。仰山、拽き出す。瀉山の前、渾家、桃林の野に放たず。那邊に捉得し、這邊に失す。

又、

鼻繩を掣断して、只麼に過ぐ。春風、芳草、多きことを争うに似たり。仰山、半辺に騎り得て後、頭角、分明に、他に触れず。

○仰山―仰山慧寂（八〇七―八八三）瀉山靈祐を嗣ぐ。瀉仰宗の宗名は、この師弟の頭字をとってつけたものである。○瀉山―瀉山靈祐（七七―八五三）百丈懷海を嗣ぐ。「瀉山水牯牛」と言われる公案がある。『碧巖錄』第二十四則にある。

一二六 霞樵が画梅

西来の祖意、全く南枝に属す。孤山会せず。霞樵、却って知る。

○霞樵―池大雅（一七二三―一七七六）。画家。白隠に参じ「隻手」の公案で省あり。

一二七 山水の図

舟、彼の岸に到り、雁、秋声を送る。山、豈に、主無からんや。未だ、全く、名を知らず。

一二八 鱸魚、桶裡に在る図

久しく江湖に別れ、常に、波瀾を思う。我れに妙計有り。早く竹竿に上る。

○鱸魚—かわへび。

一二九 杖、払、香爐

這裡、人の坐する無し。香爐、篆煙有り。悲しむに堪えたり。又、笑うに堪えたり。杖払、誰か辺にか付す。

一三〇 龍泉和尚

臨川、円覚、瑞応、鹿王、一住一去、動地、放光、依然として靈驗無し。古剣、凜として霜の如し。響。昌因上座に随喜し、龍泉東堂に触忤す。

○臨川—臨川寺。天龍寺派に属す。○円覚—鎌倉五山の第二位。○瑞応—瑞応寺、妙心寺派に属す。○鹿王—鹿王院。天竜寺派に属す。○昌因上座—不明。

○龍泉東堂—不明。

一三一 広智禅師

高峰、中峰、日月並び懸く。別に些子有り。仏祖不伝。夫れ、是れ之を華嶽の開山、正宗広智大和尚と謂う。正法、瞎驢辺に滅す。

○広智禅師—乾峰士曇（一二八五—一三六一）、南山士曇を嗣ぐ。○瞎驢—盲目の驢馬。転じて、心眼の開けぬもの。

一三二 日峰和尚

没蹤跡の処、日、杲峰に上る。汝、如し会取せば、祖宗を滅却す。睡後、唯だ無事。風来って古松を吹く。

○日峰和尚—日峰宗舜（一三六八—一四四八）か不明。

一三三 雲叟和尚

無心にして岫を出づ。也た、幽石を抱く。響。老眼、拭い来って、遙に指点す。知らず、一片、誰が為にか白き。

○雲叟和尚—不明。雲叟住のことか。

一三四 断崖和尚

惡弁の高峰、錯って断崖を接す。白雪堆裏、死屍活埋す。嘆。是れ寒梅、春信を泄さず。清香、一夜、僧齋に満つ。

○断崖和尚—断崖了義（一二六三—一三三四）高峰原妙を嗣ぐ。天目山の断崖に住したのでこの名がある。

一三五 湛堂和尚

白払、手に在り。烏藤、床に靠る。拈不起の処。直に、須らく商量すべし。父子賤機。未だ会せず。謾に言真浄、湛堂を肯うと。

○湛堂和尚—湛堂文準（一〇六一—一一一五）真浄克文を嗣ぐ。○真浄—真浄克文（一〇二五—一一〇二）。

一三六 印宗和尚

只、箇の空印、随処、宗を立す。錫、宝泉を出さん。針、千龍を降す。朝に、長谷に遊び、晩に、巨峰に帰る。途中、家舍、之に逢って逢わず。響。老来、頼に孝兒の在る有り。破笠、自ら裁ゆ。雨を帯る松。

○印宗和尚—印宗慧顓（不明）。誠拙を嗣ぐ。

一三七 本師、靈印和尚

筋斗を翻ずる底、猶、未だ真を呈せず。新保春、別を告ぐ。且つ為に金身を現す。

○靈印和尚—誠拙の受業の師。

一三八 黄国和尚

金橘、南国美なり。何んぞ、四皓の為に黄ならん。薄言、坐隠す可し。敢って、漢王に伝わらず。未生前、内白、豈に、孤竹の腸に同じからんや。咄。政老に輸く。我に一椀の湯を還せ。

○黄国和尚—不明。

一三九 洞上の尊宿

甞。阿誰そ。吾れ会せず。汝、自ら知る。等閑に触著すれば、雙眉を剔起す。画裡に向って覓むること莫れ。似たるときは、則ち、也太奇。頼るに、人の名字を安ずる無し。喚んで、洞家の宗師と作す。道うこと莫れ。相い逢うて、又、相い別ると。折柳、一声、玉笛悲しむ。

○洞上—曹洞宗。○尊宿—宗門における有道有徳の人の称。○阿誰—あた。だれ。

一四〇 陽春和尚（半身）

少林の古曲、転じて陽春に入る。和する者有りと雖ども、未だ全身を現せず。

○陽春和尚—陽春主諾（？）一七三五）駿河清見寺、芝岸靈を嗣ぐ。白隠と交友を結ぶ。

一四一 石霜禪師、初め、予の荆林和尚に参じ、中ごろ、駿の独妙禪師

の辣手に触る。晩に、武溪老人に見えて脱命す。予、略して三処の

敗闕を説く。孝児の為に爺羊を証す。

全身を放下し去って、未だ荆棘林を透らず。浪りに独掌鳴らず。猶、所得の心有るがごとし。水中に打落す。口を開かんと擬す。武溪深の曲、知音を絶す。

○石霜禪師—石霜碩瓊（？）一八二八）○荆林和尚—不明。○独妙禪師—白隠慧鶴（一六八五—一七六七）。○武溪老人—月船禪慧（一七〇二—一七八一）。○敗闕—しくじる。恥をかく。

一四二

師の道、師の徳、罵る可し。讃す可し。松老い、雲閑なり。物換り、星移る。孝子、最孝なり。罵るときは、則ち、畔諺す。武の月、晴れて、嬋娟、湘江の水、正に渺漫。咄。喚んで建長和尚と作す。又、是れ雲居の羅漢。

一四三 潜嶽禪師、因って仏智に参ず。智曰く、聞く、法華經を講ず

と。是なりや、也た否や。師曰く、不敢。智、仏子を挙して曰く、斯の經、如何んが講得せん。師、措くこと無し。久しくして、其の旨を領ず。後、如法に住し、尋ねて嶺昌を創む。見住の機公、真を画いて賛を請う。

虚空、講じ得て、頑石、能く聴く。他、重ねて仏を举せず。汝、也た、斯の經を説く。

○潜嶽禪師—潜嶽祖龍（一六三一—一六八六）盤珪永琢を嗣ぐ。祖龍は、初め

天台の学を修めた。後盤石に参じ、如法寺に住した。

一四四 百川禪師

学海、枯渴し、百川逆流す。宝山の古錐、箇の宗猷を得たり。横に三尺の竹篋子を拈じ、仏魔を打殺す、三十秋。

○百川禪師—不明。

一四五 長天和尚

永泉の一滴、其の口を嗽ぐに足る。長天の片雲、空に釘著せず。泰山嵩嶽に弥布し、渭北江東に瀰漫す。孝児、何んぞ、爺の諱に触れん。師父、全く祖風を振う。咦。将に謂えり。国を按んじて、馬を買い得ると。元と是れ景德を旧主翁。

○長天和尚—不明。

一四六 天嶺和尚

清源、点滴無し。天嶺、纖埃を絶す。将に謂えり。巴鼻没して、当头活捉し来る。雙瞳、黒くして漆の如し。其の言、淡にして、蜜に非ず。僧臘五十年。住山三十七。宗風、阿誰にか嗣ぐ。瑤堂に得て、質に授く。咄。多くは、白払の手中に動くを見る。烏藤の丈室に眠ることを知らず。

○天嶺和尚—不明。○瑤堂—不明。

一四七 桑集禪師

孤節、扶け過ぐ。湘江の水。隻履、深く埋む。嵩嶽の雲。月、桑州に上って、画、似るも明らかなり。霜風、雁を吹いて、乱れて紛紛。

○桑集禪師—不明。

一四八 諾翁和尚

這の什麼をか諾す。福寿無量。天随不会。方に妙なり挙揚するに。大道、源深く流れ、愈遠し。子孫、再び愚堂に見ゆるに堪たり。

○諾翁和尚—不明。○愚堂—愚堂東寔（一五七九一六六一）。

一四九 華榮禪師

祥泉、滴水無し。熊野、千尋に聳え、太元の面を見得し。初めて知る、開祖の心。響。祇園葉葉、万年の後。限り無き香風、花影深し。

○華榮禪師—太元真倪の法嗣か。○太元—太元真倪（？）一四六〇か。円覺寺に住し、晩年、南禪寺山内の大雲に住す。

一五〇 巨川和尚

西来意を会し、東帰集を読む。一口に滑川を吸尽し、却って道う。猶、未だ唇を湿さずと。咦。渠は、是れ誰ぞ。誰は、是れ渠。手を杲峰に撒して、独足にして立つ。

○巨川和尚—不明。○東帰集—書名。一卷。別源円旨著。